

第102回 記者懇談会実施概要

- 1 日 時 2015年3月11日(水) 15:00~17:00
2 場 所 関西大学千里山キャンパス 関西大学会館 常任理事会議室
3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00~16:00)

- ・中澤 信彦 経済学部教授

発表テーマ「日本農業は生き残れるかーマルサスとTPPー」

- ・伊藤 誠 システム理工学部准教授

発表テーマ「フェムトスケールの核分子

ー宇宙元素合成を越えた人類の新たな挑戦ー」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00~17:00)

- ① 2015年度入学試験志願者・合格者状況について

資料1

- ② スローガンの発表について

資料2

- ③ 2014年度卒業式、大学院学位記授与式、留学生別科秋学期修了式

および2015年度入学式の挙行について

資料3

- ④ 2015年度客員教授の委嘱について

資料4

- ⑤ 2015年度社会安全学部連続セミナーの開催について

資料5

- ⑥ 総合図書館ラーニング・ commonsの開設および企画展の開催について

資料6

- ⑦ 関西大学博物館および年史編纂室2015年度企画展の開催について

資料7

- ⑧ 2015年度第41期(41年目)飛鳥史学文学講座の開催について

資料8

- ⑨ 関大生の活躍について

資料9

- ・経済学部生(2015年3月卒業見込み)による特別発表

4 大学側出席者

楠見晴重学長、西村枝美学長補佐、

中澤信彦経済学部教授、伊藤誠システム理工学部准教授、

小泉良幸入試センター所長、福田聡入試広報グループ長、熊博毅学術情報事務局次長、

藤本清高総合企画室長、中川雄弘広報課長、宮武明生学長課長 他

5 参考資料

- (1) 関西大学ニューズレター「Reed」第40号

- (2) 校友会主催「2015スプリングフェスティバル」チラシ

- (3) 行事予定表(3月~5月)

以上

【次回(第103回)記者懇談会開催予定】

日 時: 2015年5月8日(金) 15:00~17:00

場 所: 千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室

日本農業は生き残れるか ―マルサスと TPP―

経済学部教授 中澤信彦

【概要】

私の専門は「経済学史」（「経済学説史」「経済思想史」とも呼ばれます）です。名前が似ているために「経済史」と混同されがちですが、両者は異なる学問分野です。「経済史」が産業革命や世界恐慌など経済現象それ自体の歴史を研究するのに対して、「経済学史」はマルクスやケインズなど過去の偉大な経済学者の理論や思想を研究します。私は、過去 20 年にわたり、18 世紀後半～19 世紀前半に活躍したイギリス人経済学者トマス・ロバート・マルサスを研究してきました。マルサスは高等学校の『政治・経済』の教科書にもその名前が登場する、たいへん著名な人物です。「イギリスの経済学者マルサスは、『人口の原理』（1798 年）で、食糧生産は人口増に追いつかず、過剰人口による貧困と悪徳が必然的に発生すると説いた」、「19 世紀前半、イギリスのリカードは、工業品だけでなく農業の自由化も主張して、農業保護を唱えるマルサスと対立した」などと教科書には記されています。

なぜ過去の偉大な経済学者の考え方を学ぶ必要があるのでしょうか？ なぜ最新の経済学を学ぶだけでは不十分なのでしょうか？ それは、経済学においては相対立する多くの諸学説が同時に併存していることが常であり、しかも、最新の理論が古い理論より常にすぐれているとは限らない（一度は滅びたかのように思われた理論が時代状況の変化とともにしばしば復活する）からです。別の言い方をすれば、歴史にその名を残す大経済学者が大経済学者たるゆえんは、彼らの経済学説が時の試練を耐え抜いて、今日の経済問題を考えるためのヒントを依然としてその中に多く宿しているからなのです。

この報告では、マルサスの知的営為をたどりながら、21 世紀の日本に生きる私たちが彼の理論と思想から何を学ぶことができるのかについて考えてみたいと思います。具体的には、マルサスの経済発展論に着目して、昨今の国論を二分している TPP（環太平洋戦略経済連携協定）の加盟交渉への参加をめぐる論議についての理解を深めたいと思います。

【プロフィール】

1968 年兵庫県姫路市に生まれ、高砂市に育つ。京都大学経済学部、大阪市立大学大学院経済学研究科を経て、98 年に関西大学に専任講師として着任、現在教授。博士（経済学、京都大学）。経済学説史を担当。18・19 世紀イギリスの経済思想をバーク、マルサスといった保守派知識人の系譜からとらえなおすことを主たる研究テーマとしている。これまでの研究業績として『マルサス理論の歴史的形成』（共編、昭和堂）、『ビジネス倫理の論じ方』（共著、ナカニシヤ出版）、『イギリス保守主義の政治経済学』（単著、ミネルヴァ書房）などがある。2009 年から 11 年までマルサス学会会長を務めた。演劇活動とバンド活動（ドラム担当）に没頭する学生時代を送った縁で、現在、展覧劇場と軽音楽部の顧問を務めている。京都の街と文化をこよなく愛し、寺社仏閣巡りを趣味とする。

フェムトスケールの核分子

——宇宙元素合成を越えた人類の新たな挑戦——

システム理工学部准教授 伊藤誠

【概要】

物質を細分化してゆくとやがては「原子」という微粒子にたどりつく。原子の大きさは約 10nm(ナノメートル、100 億分の 1m)程度であり、原子の中心には「原子核」と呼ばれる重い核が存在している。原子核は「陽子」、「中性子」と呼ばれる更に微小な粒子の集合体であり、その大きさは約数 fm(フェムトメートル、100 兆分の 1m)程度である。身の回りの物質を構成している「元素」と言われるものの正体は、実はこの原子核のことである。

現代物理学の主要な研究テーマの一つは、元素の起源、つまり原子核が宇宙でどの様に合成されたかを解明することである。最も軽い元素である水素は宇宙誕生初期に形成されるが、それよりも重い元素は、その後の様々な天体现象を通じて合成される。元素合成は宇宙の高温環境で進み、例えば太陽等の恒星内部では、水素の核融合反応から始まり、最終的には鉄までが合成される。この時の温度は約 1000 万度程度であると言われている。

一方、鉄よりも重い元素、例えば金、ウラン等の重元素の起源は未だ解明されていない。現在、重元素合成が起こると考えられる有力な天体サイトの一つが「超新星爆発」である。超新星の中心温度は約 100 億度に達すると言われており、その様な高温環境下で重元素合成が爆発的に進むと予想されている。この重元素合成の鍵を握るのが「中性子過剰核」と呼ばれる原子核である。天然に存在する原子核は、ほぼ同数の中性子と陽子から構成される。一方、中性子過剰核は中性子数が過剰なアンバランスな原子核であり、超新星爆発等で一時的に合成されると考えられているが、寿命が短く、現在の宇宙には存在していない。

近年の実験技術の向上に伴い、宇宙環境を大きく越える超高温状態(約 1000~2000 億度)において、中性子過剰核を人工合成することが可能となってきた。宇宙元素合成を越える環境下では、原子核は分子に似た奇妙な振る舞いをするのが明らかになってきている。今回の懇談会では、宇宙での元素合成の話題に触れるとともに、宇宙元素合成を越えて初めてアクセス可能となる、原子核内の分子「核分子」の奇妙な性質について紹介する。

参考資料 <http://focus.aps.org/story/v22/st4>

http://www.riken.jp/~media/riken/pr/publications/riken_research/2008/rr200810.pdf

【プロフィール】

1970 年福島県生まれ。関西大学システム理工学部准教授。2000 年 3 月大阪市立大学大学院理学研究科後期博士課程修了。日本学術振興会特別研究員、筑波大学準研究員、理化学研究所基礎科学特別研究員等を経て 2009 年 4 月より現職。理学博士。専門は原子核物理(理論)。主に実験室で合成される人工元素の研究を進めている。大学時代は軽音楽サークルに所属し、ドラム練習に明け暮れていた。